

くぐもった錠の音が灰色の空に響くのを、真姫は聞くとはなしに聞いていた。

「ゆーきや(こんこ)、あられや(こんこ)……」

無意識のうちにそんな歌が唇から漏れだして、真姫は小さく首を振りつつ空を見上げる。

明け方から降り出した雪は、昼食時を過ぎてもいっこうに止む気配がなかった。

すでに辺りは一面の銀世界で、真姫が立っている場所から道路を挟んだ反対側、レンガ造りの壁の向こうに見える母校の校舎も霞んで見える。

それが雪のせいなのか、それとも建物の周囲を覆う無機質な白い防音シートのせいなのか、真姫にはわからなかった。

ただ、ときおり耳に聞こえる固く乾いた音だけが、この大雪の中でも工事が進められていることを教えてくれる。

嫌な音だ、と真姫は思った。

そこになんの意味も込められていない、ただ物と物が接触したときに物理的に発生するだけの空気の振動。

頭の芯をじわじわと締めつけられるようなその不快感に、真姫は思わず耳を塞ぎそうになる。

「……責任、感じてるの」

と、それまで人っ子一人通らなかつた道の先から、不意に真姫のよく知る声が、そう問いかけてきた。

「べつに」

こちらにゆつくりと近づいてくる、新雪を踏みしめる足音を聞きながら、真姫は振り返ることなく答える。

「本当にな？」

その少女は真姫のすぐ隣に並ぶと、同じように真姫を見ることなく、自分がかつて通っていた学校を無表情に眺めながら、確認するようにもう一度尋ねた。

「だって、私のせいじゃないもの」

これ以上の問いかけを拒否するかのようにそう言い捨てる真姫に、

「ふうん。ま、いいけど」

と、その少女もさほど興味がない様子で生返事を返す。

「なんでもこちゃんがここにいるのよ」

その態度にかすかに苛立ちを覚えながら、真姫は今度はしっかりと顔を向けてその少女、矢澤にこを睨みつけた。

「それはこっちのセリフ。あたしが歩いてたら、行く先に見知った顔がまるで魂でも抜かれたみたいにぼーっと突っ立ってたから、無視するわけにもいかななくて声をかけただけよ」

にこが視線だけを真姫に移す。

「ぼーっと、なんてしてないわよ。ちよつと考えごととしてただけ」

真姫が、ふん、と鼻を鳴らして顔をそむける。

「考えごと、ね。それで、結論は出たの？」

「……出たら苦労しないわ」

「そもそも、結論が出るようなことなの」

「それがわからないから、考えてるのよ」

売り言葉に買い言葉、でつい反論してしまった真姫だったが、実際のところ特になにかを考えていた、というわけではなかった。にこの言う通り、ぼうつとしていた、というのが正しい。

いや、と真姫は小さく首を振った。

正確には、なにも考えていなかった、というわけではない。その心理は言葉にするなら、なにを考えればいいのかを考えていた、というところだと思う。

真姫が顔を上げる。

視界一面に広がる広大な敷地。それらは全て、自分がこれまでの三年間、毎日のように通い続けた場所だった。

国立音ノ木坂学院。

大学の付属以外では日本唯一の国立の高等学校である、秋葉原と神田、神保町の中間に立地するこの学園の廃校が決定したのは、真姫が最上級生に進級した今年の、暑い夏の盛りのことだった。

目の前に置かれたガラスのストローに軽く口をつけて、

真姫はまたすぐに視線を手の中のスマートフォンに落とすた。

テーブルを挟んだ向かい側では、にこが同じようにスマートフォンをいじっている。

店に入ってから、すでに一時間以上が経過していたが、そのあいだほとんど会話らしい会話は交わしていなかった。

メイド服に身を包んだ店員がたまに水のおかわりを持ってきてくれるが、注文したドリンクすらまだ飲みきつてはおらず、結局一度も注いでもらうことがないまま、気づけばドリンクも氷が完全に溶けて薄味のついた氷水のようになってしまう。

会話がないうこと自体には、居心地の悪さを感じたことはなかった。

むしろこのゆったりとした時間が、真姫は好きだった。話したいことがあれば話す。なければ話さない。

手を伸ばせば届く距離、とでもいうのだろうか。

いつも手を繋いでばかりでは手がしびれてしまう。と言って離れたままでは寂しくなることもある。

触れたい、と思ったときにいつでも触れられる、そんな距離が好ましい、と真姫は思う。

なんとなく、手のひらに目をやってみる。

実際、にこがからかい半分に手を取ることはあっても、

自分からにこと手を繋ごうとしたことなどなかった。
べつににこに触れるのが嫌というわけではない。ただ単
に照れくさいというだけだ。

たまには、こちらから手を握ってみようか。

そうしたら、にこはどんな反応をするだろう。

そう思って、ちらり、とにこに顔を向けたときだった。

「なににやにやしてるのよ」

いつからこちらを見ていたのか、にこが真姫を眺めなが
ら呆れたようにつぶやいた。

「に、にやにやなんてしてないわよ！」

真姫が顔を朱くしながら慌てて言い返す。

「頬がゆるんでるわよ。さわってたしかめてみたら」

言われて、思わず手のひらで自分の顔をさする真姫に、

「ほら、やっぱりにやにやしてた自覚あるんじゃない」

にこが、してやったり、という笑みを浮かべる。

「うっ……」

それ以上なにも言えず、不本意そうにそっぽを向いてし

まう真姫。

「もう、冗談だよ。真姫ちゃんはかわいいねえ」

身を乗り出して真姫の頭を撫でるにこの手を、

「子供扱いしないで」

真姫は片手で振り払うように押しつけた。

「だって、あたしはもう大人だもの」

「二十歳になったってだけじゃない」

「この国の法律ではね、ハタチになったら大人なんだよ」

「身体は全然子供だけだね」

「なっ……ま、真姫ちゃんがあたしの身体のなにを知つて
るのよ！」

「知ってるわよ。お風呂とかで何度も見てるし」

「真姫ちゃんのえっちー！」

「ちよっとこんなところで人聞きの悪いこと……」

言いかけて、真姫が声のトーンを落とす。

思わずいつもの調子で話してしまったが、ここは学校で
も屋外でもなく、他にも客のいる喫茶店なのだ。

幸いすぐ隣のテーブルは空いてはいたものの、他の席に
は普通に何組かのお客がいるような中で話す内容ではな
い。

「……はあ」

浮きかかっていた腰を椅子に深々と落として、真姫は天
井を見上げた。

どうして、いつも彼女のペースに乗せられてしまうんだ
ろう。

経験の差だろうか。歳は、二つしか違わないのに。

「ねえ真姫ちゃん」

名前を呼ばれて、ふと思う。

彼女が自分のことを、真姫ちゃん、と呼ぶようになった

のはいつからだっただろう。

あの海での合宿からだろうか。いや、あれはたしかにきつかけにはなつたが、呼び方が変わったのはもう少しあとだったような気もする。

そう呼ばれるのは、悪い気はしなかった。西木野さん、などと呼ばれる方がどことなく他人行儀な気がして、距離を感じてあまり好きではない。

「あたし、久しぶりにこれ飲みたいんだけど、頼んでもいい？」

そうだ。

呼び方と言えば、彼女はいつから自分のことを、あたし、と言うようになったんだろうか。

出会ったときから、人前では基本的には、にこ、と名前で自分のことを呼んでいたはずだ。

それがいつの間にか、あたし、になっている。卒業したあたりからだろうか。いや、考えてみれば、いまでも彼女は自分たち以外の誰がいるときは、にこ、で通していたはずだ。

彼女が、あたし、という一人称を使うのは、私の前でだけ――

「ねえ、真姫ちゃんでは」

「もう、頼みたかったら頼めば」

言いかけて、なんとなく嫌な予感がして真姫は身体を起

こした。

「ちよつと待って。なにを頼む気」

「これよこれ。カップルジュース」

にこがテーブルに広げたメニューの一角を指さす。

そこに書かれていたのは、本来デザートの盛りつけに使うのではないかという大きなガラスの器に、淡いパステル色のジュースがなみなみと注がれ、そこに二本のストローがまるでハートマークを描くようにささっている、カップルジュースと呼ばれるドリンクだった。

「はあ？」

真姫が頓狂な声をあげる。

「考えてみたら、あたしが卒業してから一回も飲んでないでしょ」

「一回も、つてそもそも一回しか飲んだことないじゃない」

「だから、また飲んでみたいの」

なんなのよ急に、と訝しむ真姫に、

「写真が出てきたの」

と、にこがスマートフォンを取り出して、画面を真姫に向けた。

そこに写っていたのは、まだにこが卒業する以前の、制服姿のことに真姫が不本意そうな顔でカップルジュースに口をつけている姿だった。

「これ見たら、なんだか急に飲みたくなってきちゃって」

